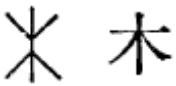
植物に関する部首



木は、立ち木の象形です。紙のまだなかった時代は、木の札に字を書き、金属の道具のなかった時代には、木を使いました。だから記録に関係するものや、機械などを表わすのにこの“木”を使っています。

本は、木の根に当たる部分にしるしを付けて、根を示した指事字です。本。これと反対に、木の“すえ”を表わしたのが「末（本）」という字です。本の音は、根（コン）の変化したものです。

札は、木と乙（イツ）との形声字で、“木のふだ”のことです。これに字を書いてひもでとじたものが冊です。冊は、その形を使った象形字です。冊がサツと読まれるのは、札（サツ）に影響されたためでしょう。「お金の札」「検札」（切符）「表札」など、材料が紙でも、金属でも関係なく使われています。

机は、几が本字。古字は冂で、つくえの象形字です。後に、材料の木を加えました。音はキ。机上の論。

朽は、丂（コウ）と木との会意形声字。丂は、上がつかえで伸び悩んでいる形です。“伸びなくなった木”という意味で、“くちる”意味を表わしています。音は変化してキュウ。宰我という人は昼寝をして、「朽木ほるべからず」（腐った木では彫刻しようがない）と孔子に叱られました。

枯は、古（コ）と木との会意形声字。木が古びて“かれる”という意味の字です。枯木死灰（しかい）枯淡の趣き。

朱は、 で、木の中心部を示した指事字です。幹の中心部の“あかい”部分を示したものです。“あか”。朱にまじわれば赤くなる。

株は、朱（シュ）と木との会意形声字。木を切ったあとの“切りかぶ”のことで、朱の部分が見えるからです。「守株（しゅしゅ）」は、待ちぼうけの歌で知られた故事です。

材は、才（サイ）と木との会意形声字。才は、木がわずかに根を張り始めた象形指事字。これからりっぱになる“もと”を表わした字です（財の項参照）。りっぱな道具や建物のもとである木が“材”です。材料、資材、人材。

条は、條が本字。幼と同音の攸と木との会意字で、“小枝”を表わした字。転じて、“すじ”の意味に使われます。条文、条例、条項。

杯は、不（ハイ）(hi)と木の形声字。木で作った“さかずき”のこと。「盃」とも

書きます。玉杯、賜杯。カップの意味にも使われています。天皇杯。

枚は、攵（手の攵の項参照）と木との会意字。むちか棒きれ程度の木のことを言う字です。転じて、それらを数える時の助数詞になりました。一枚、二枚。

枢は、区と木との会意字。品物や家畜を区分けして入れておく所が区です。この区から出し入れする時に開閉するしかけが枢です。重要な所だというので、「枢要」「中枢」などと使われています。

架は、“木を加する”という意味の字です。“木をかけ渡す”こと。架橋。転じて“たな”（棚）のこと。書架。「架空」は、とてもできないことですから、“想像”の意味に使います。

某は、甘と木の会意字で、“おいしい実のなる木”という意味の字です。音はボウ。“うめ”が本義ですが、今は“なにがし”（ある人）という意味になりました。某月某日。「うめ」は楳となりましたが、同音の毎（ボ）を用いて梅という字を作りました。

染は、木と氷と九の会意字。昔は衣類をそめるのに、草や木の汁を煮て、色を煮出し、これに漬けました。何回もくり返さないと染まらないので、九と水とでこれを表わしたのです。

柔は、矛と木との会意字。“つよい丈夫な木”という意味が本義だと思います。柳の枝に吹き折れなしで、転じて“しなやか”“やわらか”の意味になったのでしょう。柔軟（じゅうなん）、柔和（しなやか）。

栄は、榮が本字です。火が明るく燃える意味の （虫の項の螢参照）と木との会意形声字で、音は がなまってエイ。“花が燃えるように美しく咲く”が本義です。転じて“さかえる”意味になりました。栄枯盛衰、栄華。

校は、人が足を交叉させる象形の の交と木との会意形声字で、“人の手足を交叉させたまま動けないようにはめ込む木製の処刑道具”のことです。“手かせ、足かせ”が本義です。黌（コウ）と同音なので、古くから「学校」の意味に使われています。「校正」は、罪人を“調べる”意味の校です。

核は、根の象形の亥（カク）（刀の刻の項参照）と木との会意形声字で、“草木の根”が本義の字。大切な所という意味で、専ら“大切な所”の意味に使われます。また、根からさかのぼって“種”“木の実”の意味にも使われます。

案は、按（しらべる）の意味の安と木との会意形声字。調査の書類

を書くのに用いる“つくえ”のこと。転じて、“考え”という意味に使います。立案、草案、案外。

械は、戒(カイ)と木との会意形声字で、“罪人を戒めるための責め道具”のことです。“かせ”などと言います。転じて“しかけ”ということで、機械。

機は、機微の意味の幾(キ)と木との会意形声字。その働きが微妙である“しかけ”を表わした字です。「機会」は効果に微妙な働きを持つ時期という意味です。機械類が昔はすべて木製品であったことを字がよく物語っています。

植は、直(チョク)と木との会意形声字。木を直立させるという意味の字で、苗木を移し“うえる”ことを表わした字です。音は直(チョク)の変化したショク。植樹、移植、植民。

棋は、其(キ)と木の形声字。将棋の“こま”のことです。囲碁は“石”なので「碁」です。

棒は、“奉(ささ)げ持つ木”という意味の会意形声字で、音は奉(ホウ)です。“手に持てる程度の大きさの丸太”のことです。

棺は、“死者の館”という意味の官と木との会意形声字です。

極は、亟(キョク)と木との会意形声字です。亟は で、狭い所に追いつめられ、今にもとらえられそうになって悲鳴をあげていることを表わした字です。“進退きわまった状態”を表わしていて、“きわまる”という意味の字です。極は、“木の窮まる所”という意味の字で、家屋の“むな木”が本義ですが、今は単に亟の意味に用います。北極、極端、終極。

概は、既(ki)と木との形声字で、米をますではかる時に使う棒(ますかき)のことです。高い所と低い所とがこの棒でならされるので、“ならす”意味になりました。概略。その結果は“あらまし”“おおむね”という意味になります。

楼は、樓が本字です。婁(ロウ)は、屢や數(数)の婁(ロウ)で、“重なる”意味の部首です。屋根の重なった、つまり平屋ではない“高層のたかどの”を言います。楼閣、楼台。

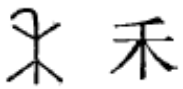
様は、羕(ヨウ)と木との形声字で、“とちの木”が本義の字です。“ありさま”(様子)という使い方は橡の仮借です。橡は様の別字で、やはり“とちの木”のことです。

横は、黄(オウ)と木との形声字で、“門のよこ木”のことです。転じて、広く

“よこ”の意味に用いられるようになりました。「横道」は邪道ですから、“悪い”意味に用いられます。横着（おうちゃく）、横暴、横行。

標は、票（ヒョウ）と木との会意形声字。人目によくつく“目じるしの木”です。標柱、標識。

票は、[illegible]で西（ヨウ）と火の形声字で、火の燃え揚がる意味の字です。“火花”が本義で“目じるし”の意味になりました。「表」や「礼」や「券」の意味に使われます。



禾は、稲の穂がみのって垂れ下がっている形の象形字です。音はカ（kwa）。

和は、豊年で、“稲が十分口にはいる”という意味の字で、「平和」を表わす。衣食足りて礼節を知る。食足りて心が“なごやかになる”とはよく庶民の情を表わした字。音は禾（カ）がなまってワ（wa）。

利は、禾と刀との会意字です。豊年だと思っても、取り入れ寸前で暴風のために収穫が零になることがあります。取り入れて初めて、「利益」がはっきりします。稲と鎌の意味の刀とで、これを表わしました。

種は、“よくみのった重い禾（いね）”という意味の会意形声字です。音は重がつまってシュ。収穫した稲の中から、最も大粒の重いものを選んで“たね”とします。

穫は、鳥を取る意味の蒦（カク）と禾との会意形声字で、“禾（いね）を取ること”です。動物を取るのは「獲」と言います。

秒は、細く小さい意味の少と禾との会意字で、針のような“もみの先毛”のことです。“微細”の意味に用いられます。角度や時間で、分の六十分の一、のことを言います。音は、少（ショウ）が変化してビョウ。

秋は、[illegible]の略字の火と禾との会意形声字で、“禾（いね）のみのる季節”を表わした字です。音のシュウは、火の燃える音です。火は熟す意味を表わしたものと考えることもできましょう。

科は、米をはかる“ます”の象形の斗と禾（カ）との会意形声字です。“米の取れ高の多少を調べて、品質の等級をつける”ことです。“品定め”。転じて、物事を“分類”し、“秩序立てる”意味に使います。学科、科目、科学。

秩は、窒と同音の失と禾との形声字で、“収穫した禾を窒（穴倉）に納める”という意味の字です。きちんと積まなければならないので、「秩序整然」という使い方が生まれました。

移は、禾（いね）と多（イ）との形声字で、稲が豊かにみのって風にゆれ動く様

を言うのが本義ですが、今では、「迻」(うつる)の仮借字として使われます。収穫が多くてひと所に収容できずに、新しい倉を作って、そこに“うつす”のだと解くこともできそうです。

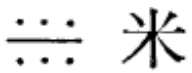
程は、“呈出する禾(いね)”という意味の会意形声字です。法規によって、呈出すべき量が決められていますので、転じて“分量”、また“きまり”の意味になりました。行程、規程。

税は、“分ける”“抜く”の意味の兌と禾との会意字で、収穫物の中から、租税として、“別に分けておく禾(いね)”という意味の字です。“今では金で納めるので税金と言います。

穀は、殼(カク)と禾との会意形声字です。稲のもみ殻をかぶっているのが、穀です。また、稲に限らず、穀をかぶった作物を「穀物(こくもつ)」、または「穀類」と言います。

穂は、“天の恵(めぐ)みの禾(いね)”という意味の字で、“稲のほ”を表わしたものです。会意字。音は“稲穂が垂(ホ)れる”の垂です。

稿は、“高くのびた稲のくき”を表わした会意形声字です。“わら”のこと。長い茎は実を結ぶための“下地”です。それで、書物の“下書き”を「稿」と言うようになりました。“わら”の意味を表わすのに“稾”また“藁”という字を作りました。



米は、稲穂にもみが付いている形を象った象形字です。実際の米は、もみをついて、殻を取ったものです。肝芽や黒い薄皮の付いたのを玄米と言います。これは保存がききますので積み重ねておくので、粗と言うことは第 2 章の且で述べました。漢音ベイ、呉音マイ。

粉は、“米を細かく分ける”という意味の会意形声字で、“こな”のことです。

粋は、粹が本字。砕(くだ)くという意味の卒と米との会意形声字で、“米をよくついて白げた米”のことです。「精」と同じ意味の字です。精粋、純粋。

粒は、立(リュウ)と米との形声字で、米の一つぶ一つぶのこと。転じて、「砂粒」「微粒子」などと使います。

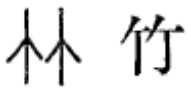
粘は、黏が本字。霑(うるおう)の意味の占と黍との形声字で、“うるおった黍(きび)”の“ねばる”ことを表わしたものです。

粧は、妝(ショウ)と同じ“よそおう”という意味の庄(ショウ)と米との形声字で、“米の粉でよそおいをする”という意味の字です。昔は米を細かくすりつぶ

して、これを顔料としました。これが「白粉」（おしろい）です。

糧は、“はかる”意味の量（リョウ）と米との会意形声字。“食料として必要なだけの量（リョウ）の米”“かて”という意味の字です。

糖は、荳（トウ）（もやし）の意味の唐（トウ）と米との形声字です。米のもやしから、糖分である“あめ”を作ります。



竹は、竹の子の出始めた形を象った象形字です。音はチク。竹を薄く削って作ったふだは、本の札と共に記録に使われました。簡や策がこれです。

簡は、竹と間（カン）との形声字。音の間（カン）は、刊（カン）の意味です。竹を割（わ）って削り、干（ほ）して、これに漆（うるし）で書きました。“竹ふだ”が本義。転じて、“書物”また“手紙”さらに転じて、“軽便”（手がる）の意味に使われます。竹簡、簡策、書簡、簡単。

策は、竹と束（サイ）（si）との形声字。音は束（サイ）がつまってサク。簡をひもでとじた冊を表わしたものです。“簡に文字を書きつけたもの”が策の本義です。転じて、“はかりごと”の意味に用いられます。策略、対策。

管は、竹と官（カン）との会意形声字。音の官は、串（カン）（貫く）の意味です。竹の節を貫いた“くだ”が管です。

範は、竹で作った型という意味の笵（ハン）と車との会意形声字で、“車の通る道”“軌道”が本義の字です。転じて、“人の行なうべき道徳”“手本”。規範、模範。模は“木型（きがた）”型は“土型（つちがた）”が本義です。

篤は、竹（チク）と馬の形声字。竹（チク）がトクに変化しました。“馬がトコトコと歩く”という意味の字で、“ゆっくり歩く”ことを表わした字です。転じて、“慎重”“重厚”の意味に使われます。懇篤、篤志（人情が厚い）、危篤（病気が重い）。

築は、筑（チク）と木の形声字。地がために、丸太で“木づく”こと。筑（チク）は、木でつく音を表わしたものです。転じて、“家”など“建てる”意味に使います。建築、築港。

符は、竹と付（フ）との会意形声字。契約をする時、簡に文字を誌し、これを割って、相手に与（付）えた。これが符です。“契約の後日のための証拠のしるし”です。割符。

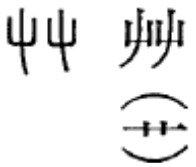
簿は、竹と薄（ホ）との会意形声字。薄（ホ・ハク）は、すすきを編んで（縛（しば）るので、音は縛（ハク））作った“すだれ”のこと（わが国では薄を“すすき”と解し、“すすき”の意味に使っています）。簿は、竹簡を縛したもので、今の“帳面”に当たります。帳簿、名簿。

簀は、竹と責(セキ)の形声字。責(セキ)が変化してサク。わが国では、つづめて「す」、または「すの子」と呼んでいます。“竹を編んで作った敷物”が本義ですが、今では、板を編んで作ったものを言います。

簾は、竹と廉(レン)との会意形声字。廉は、家の側面の外界と接する所です。ここに垂れ下げる“竹のすだれ”が簾です。“すだれ”は“簀垂れ”という意味です。「簾中」は、“すだれの中の貴人”、という意味で、“大名の正妻”の異称に用いられました。

箱は、竹と相との会意形声字。相は、“助ける”という意味の字ですが、助ける人あれば必ず助けられる人ありで、二人いなければなりません。「相互」「相対」「相思」というように使います。箱は、“ふたのある箱”のことです。上下相逢うはこです。

算は、竹と具の会意字。“竹で作った計数用具”のことです。“算木”、転じて“数を数える”こと。



艸は、草の生えている庭を象った象形字で、「草」の本字。草冠の原形です。音はソウ。

草は、早(ソウ)という音をつけ加えたもので、形声字です。“粗末”の意味に使われます。草屋、草案、草競馬。

芳は、あたり(四方)一面が草という意味の字で、“草の香”がただよっていることです。“かんばしい”こと。また、“草の放つもの”と考えることもできます。芳香。転じて敬称に用います。芳名、芳志。

葉は、艹と世と木の会意字です。世は、十を三つ組み合わせた字で、三十の意味です。人間は三十年を“一世代”とするというので、「世代」という意味になりました。葉は、草や木にたくさん(世)付いている“は”を表わしたものです。「笹」は、竹の葉で、“ささ”のことです。

芽は、艹と牙(ガ)(きば)との会意形声字。草木の“め”の出始めの形は牙の形をしているので、芽でこれを表わしたものです。発芽。

若は、艹と右の会意字。“手で摘み取る草”という意味の字で、“わか草”が本義です。音は、弱(ジャク)(わかい)です。若年(ジャクネン)(弱年)。

荘は、艹と壮(ソウ)との会意形声字。“盛ん(壮)に草の茂ること”が本義。転じて、いなかの別宅の意味に使います。別荘。

華は、艹と垂(𠦪)の会意字。花の美しく垂れた形を表わした字です。花の古字です。今は“草のお化け”の花の方が多く用いられ、この字は、「華美」「華燭」「栄華」など、“花やか”の意味に用いられます。

菜は、⺾と采(採の本字)との会意形声字。“摘み採って食べる草”という意味の字です。食用とする草の総称。“な”。野菜。

採は、扌と采との会意字。采は、爫と木の会意字で、“木の葉や、木の実をもぎ取る”こと。転じて「采領」「采地」などの用法ができたため、扌を加えるようになりました。採集、採用。

茂は、⺾と戊との形声字。草のぼうぼうとしげること。音は戊、呉音はモ。繁茂、茂生。

荒は、⺾と荒との会意形声字。荒は、川が氾濫して、地上の動植物を亡ぼすこと。そこに雑草が茂ったのが(荒)です。“あれ地”が本義。土地の“あれる”ことから転じて“心のあらい”こと。荒涼、荒廃。

苦は、⺾と古との会意形声字。薬草は干してよく乾燥させて保存します。“古い草”とは薬草のことです。“にがい”が本義です。転じて“くるしい”意味に使います。苦手、苦笑、苦痛、音は古が変化してク。

英は、⺾と央との会意形声字。“草の中央”という意味の字で、“草花”が本義。特に、房になって咲く花、“はなぶさ”の意味に使われます。今は、「英才」「英雄」などと使います。音は央が変化してエイ。

苗は、“田に生ずる草”という意味の会意字で、“なえ”のことです。音は、小さいという意味の秒。

荊は、⺾と刑との会意形声字。人を責める刺(とげ)を持った“いばら”のこと。「荊妻」は、自分の妻を謙遜して言うことば。

荷は、⺾と何との形声字で、蓮(はす)のこと。花は「蓮華」、葉は「荷葉」と言います。はすの葉は、物を包むのに使われ、“包み”の意味になりました。荷物、出荷。

落は、⺾と洛の形声字。草の葉の枯れおちること。各は“高い所から降下する”のが本義の字。

葬は、二つの⺾と死との会意字で、“死体を草原にほうむる”こと。音は喪。

蓄は、⺾と畜との会意形声字。畜は田のすみに穴倉を掘って“たくわえる”こと。⺾は穀物のこと。五穀をたくわえるのが蓄です。今は、広く「蓄財」「蓄電」と使います。

蒸は、⺾と烝の会意形声字。烝は水を下から火で熱して、蒸気を立ち上らせること。“むす”ことです。音は昇です。蒸は、“穀物などをむす”こと。今は単に“むす”意味に使われています。蒸発、蒸気。烝気の方が本義に適った使い方ですが。

蔵は、臧が本字。臧(ソウ)と艹との会意形声字。臧は爿(ショウ)と臣と戈の会意形声字で、家来が武器を持って守る意味の字。“家来”“よい”“おさめる”の意味に使われます。蔵は、“穀物などをおさめてしまう”という意味の字です。物をしまう所の「倉(くら)」の音は、この臧(ソウ)の意味です。

薄は、艹と溥(ハク)(水が溢れひろがること)との会意形声字。“雑草が一面に生い茂る”が本義の字。“やせた土地”のこと。故に、“とぼしい”意味に使われます。薄学、薄情。薄が、雑草を編んで作った“すたれ”の意味に使われることは竹の項の“簿”で述べました。

薬は、苦いが飲めば病気がなおって楽になる“薬草”が本義で、艹と楽(ラク)との会意形声字です。楽(ラク)が変化してヤク。

薪は、艹と新(シン)との会意形声字です。新は辛(シン)と木と斤(おの)(斧)との会意形声字で、木を切って作った“たき木”が本義の字です。切り口の“あたらしい”ところから、「新旧」「革新」という使い方に転用されたため、本義の“たき木”を表わすために、たきつけに用いる草を加えて“薪”としたものです。臥薪嘗胆。

薫は、艹と熏(クン)との会意形声字。熏は火の黒の項に述べてあるように、“火を燃やしてくすぶる”意味の字です。薫は、“芳草をくゆらして、香気を発散させる”ことです。人を善導することにも使います。薫風、薫陶。

藩は、艹と潘(ハン)との会意形声字。潘は水面にできる“うずまき”のこと。藩は、家の周囲を取り巻く“まがき”が本義です。封建時代、諸侯は王室の「藩屏(ハンペイ)」(まがきやへい)であるというので、諸侯の称になりました。藩主。